
生命

トゥカチンチラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生命

【Nコード】

N4915U

【作者名】

トウカチンチラ

【あらすじ】

生きた屍ともいえる男は、薄暗い部屋の中で伏していた。彼はどうなるのか？

屍、そしてその過去

「何を待っているのだ？」

「復活を」 （「ジャン・クリストフ」ロマン・ロラン）

小さい部屋の中で男は寝ていた。部屋には大きい窓が一つあるきりであり、その窓も黒い二枚のカーテンにより今は覆われている。それらのカーテンが太陽の光が部屋内に差し込むことを妨害しているかのようにあり、部屋に光は差し込まれていない暗闇の状態にあることを暗に意味する。……いや、二枚のカーテンの隙間からわずかながらも光が零れ落ちていいるから、部屋の中が漆黒の闇であった、という程ではない。とはいえ、やはり部屋の中は暗いことには変わりはない。

部屋には、布団、机、椅子、幾つかの飲み干された空き缶、オーディオ機器、本棚、料理や顔洗するための流し台があり、それ以外に特に目ぼしいものは見当たらない。トイレやシャワーが見当たらないということは、男はそれらが共用であるアパートに住んでいるのだらう。それ故家賃の安いぼろアパートだということが、容易に推測される。

部屋の中は何の特徴もないのが特徴、といったところで、洒落っ気一つない、薄汚い部屋である。アイドルのポスターやら家族や恋人との思い出写真も見当たらない。

ただ、特徴付けているものを一つ挙げるとすれば、本棚ということになるかもしれない。壁の一面をすべて覆っている形で本棚が、陰鬱な部屋の雰囲気を超然としているかのように佇んでおり、その本棚には本がびっしりと並んでいる。厳密に冊数を数え上げたわけではないが、ゆうに100冊は超えているのは確実であり、飾られている本の内、題名を少しだけ挙げるとすれば「魔の山」や「西洋哲学史（上・中・下）」、「罪と罰」という具合になり、今にも難しそ

うなものが並んでいる。どの本も表紙が若干よろよろとしており、使用感を漂わせていることから、ただの虚栄心でおいてあるのではなく、全て読了しているのだろう。インテリ精神の美的感覚が抹殺されている部屋でのこの本棚の存在感は、ひとときわ異彩を放っている。

そういえば、机の上にも本が何冊か置かれており、更に何本かのボールペンと開かれたノートも見受けられる。ノートには何やら男が書きなぐったような乱雑な文章が書かれている。机の上は一向に整頓されておらず、まるで長い間このような乱雑さにあるかのようなのである。

布団の上で寝ている男がもぞもぞと動き始め、枕にうずめていた頭を欠伸をしながらあげる。顔や目は生気があまり漂わせておらず、起床して新たな一日を迎えるのをどこか拒んでいるようである。また、顔には薄い髭がぼつぼつと生えており、身なりの手入れを怠っていることも容易に理解できる。

あげた顔をまた枕にうずめる。それと同時に「うえ」といったうめき声をあげ、手で口を覆う。傍に投げ捨てられたかのようにおいてある無数のアルコール缶から察するに、昨日アルコールを飲み浸し、その反動で本日二日酔いに呻吟しているのだろう。部屋全体を覆っている黒い、もの憂げな雰囲気と、現在のこの男の状態とは見事に調和している。

二時間・・・三時間・・・時間がいくら経過しようとも、男は布団の中から立ち上がらない。生命の根源ともいえる「活動」を、遂行しようとする気配をこの男から読み取ることとはどうやら不可能のようである。差し詰め、生きた屍という渾名がお似合いだろう。

床に伏している男は昔からこのような存在だったのか？・・・いや、違う。かつてこの男は断じて死んではいなかった。むしろ、この地上の誰よりも生命の輝きを体内から放射していた。誰よりも

人生を謳歌しようと、艱難に打ち克ち生き抜こうと強く決心し、あらゆるものを愛した。無論、対象は人間であるにしろ何であるにしろ好き嫌いはあったが、いわば根本的なもの「生きる」ということを誰よりも愛した。そのため、何かを嫌う時も、心のどこかで対象を嫌うという思念を味わったことにも、どこか感謝めいた念を有していた。苦難に出会った時も、彼は決して尻込みせず、それどころか苦難を打破する機会が与えられたことに喜びすら感じていたのである。

彼の体内にあった太陽は、近づくもの、関わるものにも嫌が応にもその光を照らし、どれ程生命力が枯渇していた者であっても、その光により生命力が取り戻されることとなった。すなわち、接するもの全てに、その人物を蘇生させる程の鮮烈な影響を与えていたのである。

されど、その輝きは今は何処へ？何処へと消えていったのか？何故彼の生命力は凋んでしまったのか？

おお！運命よ！！汝はこの男にどのような試練を与えたのか？如何に運命は酷薄なものとは雖も、此程までの打撃を与える必要は無いというのに！！

男は小学校、中学校と成績は抜群に優秀というわけではなかった。アニメ、ゲーム、スポーツといった趣味に忙しく、勉強は気紛れでしかやらなかった。しかし、テストの点数という知識では彼を上回っていたものは数多くいたが、知性というものについてはそうそう彼にひけをとるものはおらず、本気を出せば試験なぞ簡単に首位をとれる雰囲気を漂わせていた。そのため、彼の同級生は彼を頭のいい人間と自発的に素直に認め、それどころか教師ですら彼を賛辞していた程である。無論、その溢れるばかりの生命力により多くの者が心から彼を愛していたのは先程述べた。高校でも成績そのものはそれ程優秀ではなかったため大学受験では失敗したが、卒業してから一年間の浪人生活を送ることになったのだが、依然趣味に対し

て向けていた情熱を、今度は受験勉強に向け、結果世間では名の知れた大学に合格。それで大学時代を送ることになるわけである。

大学時代とは一般的に20歳前後を指す時期であるのだが、その絶頂に達している若さを、他の者同様彼は大いに享受したのである。勉強は殆どせず、アルバイトで金を蓄えつつ自分の趣味に没頭した。旅行、バスケットボール、そして何よりも好きな音楽、殊にギター演奏やクラシック音楽の鑑賞に身を捧げた。合コンにも参加し、その群を抜いた存在感により艶聞豊かであり、放蕩とも言える性的生活を送ったこともあった。だがやはり彼は愛された。いずれにせよこの時期を存分に謳歌していたことは自他ともに認めるものである。

だが、そんな彼にもある一つの要素が、心の中で不安の翳りを萌していた。

就職である。

彼は就職することを嫌がった。スーツを着用して、毎日規則に従い傀儡の如く会社に出勤する自分の姿を想像して心が沈んでしまうことがしばしばあった。恐怖の念すら感じた。社会の荒波やら厳しさやら、そういったものを恐れたのではない。むしろ、会社に依存し、束縛される自分を思い浮かべて、生涯を会社で過ごすということが恐ろしかったのであろう。「平凡」という概念を本能から嫌ったのである。

無論、大学に入ってからすぐにこの念が頭を過つたわけではない。だが、大学キャンパスを徘徊していて時折スーツ姿の就活生を彼が発見すると、無意識に目を逸らしてしまうことが何度もあった。

不安の翳りは最初はいわば小さな炎として心に宿っていて、意識を集中しなければ自分でも発見できないものであった。しかし、二年生、三年生と進級するにつれ、体内に宿っていた炎は徐々に拡大し、その増大する不気味な熱量に嫌が応にも感じることとなり、戦慄しないわけにはいかなかった。

そしてとうとう、自分も就職活動をしなければならぬ時期が来

た。

それで、就職することに吐気すら催すような彼はどうしたか？
・ 勉強したのである。試験を合格すれば（面接もあるが）、就職できるという制度もあるので、そちらの方向に進んだ。そして、依然自分の趣味に没頭したのと同様に、この試験勉強にも只管没頭した。だが、当然それは是が非でも就職したかったからではなく、むしろ就職に対する恐怖の念を和らげたり、ごまかしたりしなかったからである。要は試験勉強に楽しみを見出したのである。

未だ嘗てこのような者がいたであろうか？就職するために勉強するのではなく、むしろその事から逃避するために勉強する者が？試験日が近づくにつれ、より一層勉強に励みながら、ああもし試験が終わらずこの状態がずっと続いてくれたら！！、という実に奇妙な矛盾を心中に抱いていた。そして更に奇妙なのは、自分でもその心中の考えの矛盾に気づいていたのである。

ああ、正しくこの男は天才であった！！中庸の徳を知らぬ異常な情熱を持ち、束縛を誰よりも嫌い、群を抜いた存在感を放つ。会社に雇われるという、世間一般に行われる儀式、通過点は、これらの要素と相反するものであり、彼にとってはいわば死活問題であった。従って、天才だからといって彼に対して嫉妬の念を抱くのは辞めて頂きたい。

しかし、結局試験には通り、就職することが決まった。そして彼は絶望した。

入社、そして退社（前書き）

入社した彼は、生きる意味も見いだせないまま、不毛な日々を送る。
そして或る日イカレタ上司がくる。

入社、そして退社

入社した彼は案の定絶望した。自由を享樂し尽くすことの出来た大学時代を送った直後だから尚更のこと、規則や上下関係により成り立っている場所に所属している自分を、鎖につながれた囚人のように感じ、人知れず嘆いたり、呻いたりした。朝、時刻通りに出勤しなければならぬだけで、彼は溜息が漏れた。

彼は仕事として翻訳・通訳をやっていたのであるが、この仕事そのものでは彼は非常に有能だった。その能力を発揮したら周囲の人々は驚愕の念を示し、半年も経てば、彼の右に出るものはいなかった。

だが、言うまでもなく組織において優秀と評されるには仕事が出来ると云々以上に、組織において定められたルールや指令、更には暗黙の慣習に従わなければならない。それについては彼は誰よりも出来なかった。苦手だった以上に、従う労をとろうとしなかったといった方が正しいだろう。

だが彼を苦しめたのは会社以上に、生きる意味、この概念への煩悶だった。小学校、中学校、高校、大学と、今までは平均的な人生を疑いの念を挟まず送ってきたわけだが、ここにきてエスカタレータでなく、自分の足で人生の途を歩みたいという欲求が出てきたのである。会社も学校同様2、3年で終了すれば我慢はきいたのかもしれないが、実際は数十年間という人生の半分を費やす場所であり、その後待っているのは半ば隠遁した老後の人生である。そのような生き方を想像する事すら彼には耐えられなかった。誰かの下に就くことも、会社に依存し続けることも（転職という概念は彼にとって無意味である。というのも何度会社が変わろうが、「会社」というアイデアに依存し続けることには変わらないのだから）、自由に大きな価値を抱く彼にはとても耐えられうるものではなかった。そしてそのような隷屬が何十年間も続くとは！！

そもそも彼にとって生きる意味とは何を示唆するのか？

それは体内において蠢いている膨大な情熱を満身創痍にまで放出し尽くすこと、いわば死に場所を見つけることである。彼にとって会社は死に場所としてはまるで相応しい場所たる資格を有していなかった。大した情熱を放出せずとも仕事をこなすことが出来る上、その放出も時には調節、自制することが求められたからである。だが、会社を辞めるといふ選択肢を彼は選ぶことが出来なかった。金銭的な問題以上に彼は自分の死に場所を未だ発見し得なかったのだから。たとえ本人の情熱量を十分に受け容れるだけの大きさを現存の仕事は有していなかったにせよ、それでも情熱を向けるべき矛盾であったことには変わらない。それすらなくなったら、彼は自分を捧げるべきものが完全になくなり、生きる屍と化してしまうのである。

「俺の、俺の進むべき道はどこだ？ 一体どの道に俺は辿ればいいのか？」こう何度も、毎日心の中で叫んだ。

そう苦悶する日々が続いていた矢先である。

ある日本屋で「罪と罰」という題名を持つ文庫本が棚にあるのが目に入り、しばし動作を止め、じつとその本を凝視した。「罪と罰」やその著者であるドストエフスキーなる名前について、彼は入社試験の勉強の際に確か暗記したはずである。彼はそれまで本、ましてや文学などを紐解いたことは殆どないのだが、その陰鬱そうな、それでいてやけに存在感が重そうな名称に心のどこかで心魅かれ、頭の片隅にその残影が焼きついていた。

その「罪と罰」を棚から手にとり、そのまま本の放つ魔力にとらえられたかの如くレジに持っていき購入した。すぐに家に帰り早速読み始めたのだが、この重く長い本を読書に不慣れな彼は長い時間を掛け、悪戦苦闘の末にようやく読了した。更に、読み終わって何か頭を打ちのめすような衝撃を受けたとか、内容に夢中になりペー지를捲る手を抑えられなかったとか、そのような文学的な感動は決して味わわなかった。というかむしろ退屈な本だとすら思った。人物

性格や物語の展開がいまいち飲み込めず、内容を理解するだけで精一杯であり、ページをめくる際も何処か義務的な観念によって行われていると感じ、分量の多さには読書中何度も辟易した。

だが、この本の何かを彼を捉えた。彼の心に自身でも説明できない余韻を残した。その正体は普通の小説では見られない異常な世界観、あるいは文学的な魔力とでも名付けたらいいだろうか、とにかく次の本を手にする動機をつくるには十分な推進力であった。

彼は読んだ。憑りつかれたかのようにただ只管に読んだ。

一日に読むページ数が逡増していく。大抵の本は2日、長くとも3日あれば読み終わられるように終いにはなった。そして一冊読み終わったら、間髪入れずに次の本を手にした。まるで逃避の場所を本に求めたかのように。

彼の手にした本には全てある共通点があった。どの作品も「天才」によつて書かれたものであるという共通点が。読了した本は全て作者が鬼籍に入ったという（この定義が正しいかはわからないが）古典だったのである。天分を有していた彼はまるで仲間を求めめるかのように本を手に取り、一緒に語り合い、戯れるかのように読んだ。そして天才の思想や世界観を味わいながら、自分の日々の孤独を紛らわしていた。

次第に彼は「天才」なる存在に異常なまでの敬意を払うようになるのだが、その反動の形で、世間で敬意を払うべきと義務付けられている存在、つまり彼の場合においては上司に対しては、敬意は一切払わなかったのは勿論の事、尊敬という仮面を被る手間すらとらなかつた。

それが彼に災いをもたらすことになる。

或る日、会社内で異動が行われ、直属の上司が変わった。そしてその上司は女だったのだが、エゴの塊であることを体からまき散らして、今にも偽善的な笑みを浮かべている彼女と初顔合わせした時、瞬時にして悟った。この女は自分の天敵であると。

その直感は見事に的中した。

部下には何かあれば怒鳴りつけ、彼女の上司、つまり権威にはネコナデ声のように甘える。部下がミスをしたら大声を張り上げ、自分がミスしたら「てへっ」と笑ってごまかす。策を弄さない真っ正直な彼とは著しく対照的である。

彼女は優秀な人物と評されており、それは上に取り入れるのが上手いからというだけではない。確かに、仕事もミスはなく、英語能力も平均よりは遙かに上である。

だが「優秀」な彼女も、「天才」な彼の敵ではなかった。発音、訳す速さ、言い回し、何より集中力、全てが格が違った。翻訳でも彼なら1時間強で終わるのを、彼女は6時間かけて行う。当然の事、この実力の違いは嫌でも周りに明らかになってくる。そして彼女も気付かないはずがない。

何やら彼女は色々周りにおべっか使ったり、部下の仕事を横取りしたり悪口いったりして、何とか自分の優秀さを保持しようとする。だが無駄であった。ナポレオンは「実力こそが裸にされた真実である」と述べているように、策を弄したところで、真なる実力を持っている彼には絶対に敵わなかった。彼が能力を行使すれば、彼女が必死になって覆っている鍍金を剥ぐには十分だった。

とうとう、彼女は彼に当たり散らすようになった。何とか怯えさせて、手加減して、自分をたててくれることを悟らせるためのだろう。それにプライドの高い彼女だから、手加減して下さいと頭を下げることは死んでも我慢ならないことは間違いない。

しかし、男は手加減なぞしなかった。というか無理である。そのためには能力を2割位に落とさないといけず、そうすれば発狂してしまう。そもそも、彼にとって成績や、優劣関係なぞどうでもよかった。彼が願っていたことはただ一つ、会社から早く帰ることである。逆に彼女は、周囲に自分の忠誠心を見せつけることもあり毎日八力の一つ覚えみたいに夜遅くまでわざとらしく残業することを願った。

簡単に言えば前提条件が違う。彼女にとって勤務している会社は

いわば自分を誇示するための生命線であるのだが、彼にとってはいわば一時的にいるだけの仮初の場所にしか過ぎないのだから。

とうとう、彼が報告しようと思えなかった。何か相手のためになると言っても、無視したり、キーボードをわざとたたいて相手を黙らせるような態度をとった。そんな馬鹿を見て、こんな無能上司の下でやってられるか、という具合に辞表届を出すに至ったのである。

自分の進むべき道を見出せないまま、とうとう会社を辞めてしまった。

（余談だが、その後の彼女について聞いた話によると、当然部下の仕事もやることになるのだが、その能力の違いがいよいよ周囲に露呈することになる。もうすでに露呈されているのにそれを露呈されることを隠すかのように、彼女はとにかく大声を出しながら暴れ回ったようである。仕事は拒否し、課長や人事に部下や職場の間（上司含む）の罵詈雑言を述べ、とうとう異動するまでの一か月間、有給を使って無断欠勤した。理性が消し飛び、発狂した患者のようになっただけである。部下が辞めているにも関わらずその悪口を鉄砲の如く並べたてたから、そのイカレっぷりは空前絶後のものである。で、最終的にはどこかへ左遷された模様）

墮落

仕事を辞めた後、彼はしばらくの間は再び得た自由を享受した。好きな時に起き、気が向いた時に食事して、一か所にじっとしていることなく、ただ心の向くままに歩くことができる。何よりの楽しみであるカフェでの読書もこれからはいつでもできる。周りにも規則にも合わせることなく行動できること、それを彼はどれほど喜んだことだろうか？

だが、それもいつまでも続きはしなかった。

退社してからは、入社していた時と同様、本読み、天才読みに没頭した。一日にめくるページ数はいよいよ多くなり、一冊読み終えたらすぐさま次の本を手を取った。彼の知識欲は一向に萎えることなく、むしろ日に日に膨張していった。

だが、いつまでも続いたわけではなかった。疑問の念が徐々に湧き上がり始めたのである。

「これほどたくさんの本を読んで一体何になるといえるのか？いくら天才により書かれた本とはいえ、所詮紙束にすぎないではないか。それをいくら読んだところで無意味なのではないのか？」

人生はいわば旅であり、その旅路は自分で歩くことにある。だが本を読むことは歩むことには決してならないのではないのか？所詮本なぞ旅のためのガイドブックにしか過ぎないのではないのか。「活動する情熱を有していた彼にとって、この思念が浮かんだのはいわば必然といえるだろう。」

本読みは受動的な活動にしか過ぎない。いくら内容が高尚であろうとも、どれだけ冊数を積み上げようとも、そのみに専心するのは引きこもりと変わらない。積極的な活動、すなわち心身を動かし、極限まで能力を行使することが彼には必要だと思ふようになったのだ。

本なぞが一体なんの役に立つというのだ？

この思念は日に日に拡大し、ついに彼の全身を覆った。彼は情熱の唯一のはけ口であった読書をやめたのである。

彼は途方にくれた。

何もすることがなくなり、社会から弾かれ、この世に居場所を失った放浪者と自分をみなすようになった。(面接を受けて、再び就職しようという考えを彼は浮かべなかつた)

本を読まなくなった後、彼は都内のあちこちを歩き回った。とくに当てもなく、目的を定めず、交通機関は一切使わずに歩いた。まるで自分の居場所を探し求めるかのように。

だがそんなものは見つからぬ!どこへ行こうとも彼は孤独を感じた。毎朝スーツを着て出勤する人々や、公園で戯れている子供たち、レストランで談笑してるカップル、カフェでアルバイトしている店員、買い物をする主婦、何らかの居場所を持つている彼等を見て、羨望の念を抱いてしまう。

一日の放浪を終え、無様にも自分の家に帰り、部屋の電気を灯すと、彼の孤独感はより一層募る。

誰もいない部屋……今は休息としての用すら足さないこの部屋に来て、彼は更にみじめになった。自分の家で安らぎすら見いだせない者が、一体どこで安らぎを見出すことができるのだろうか?

本棚に無数に置いてある本を見て、憎悪の念が彼に襲い掛かった。いつそのこと全部焼き払ってやろうか?そしてその燃え盛る炎の中で、自分も本と心中してやろうか?

そんな勇氣は無論彼にはなかつた。

活動せねば。

そう自分の心に呼びかけた。

だが何を……

彼は本を開き、ペンをとった。そして何かを書き始めた。何を書いたか?彼の考えを、彼の物語を書いた。彼の思念を、靈感を書い

た。……つまりは作家になろうとしたのである。鑑賞するものから創作するものへ。作家になり、他の著者同様、自分というものを世間に表現したいと感じた。つまりは作家にこそ、自分の居場所を求めたのである。

ペンを走らせる。これだ、これこそが俺の戦場だ、と心で若干の喜びを秘めて呟きながら。

だが湧き上がったせつかくの闘争心も、所詮は蠟燭の炎であり、微かな光しか放たない。すぐさま彼の体内に蠢いていた闇が飲み込んだ。闇……それは放浪者、孤独者、敗北者。いかに白痴の女が上司についたとはいえ、俺は会社から逃げたのではないのか？俺は敗北者ではないのか？

彼の書いた文章は、内容はさておき、技巧的に下手なのは明らかだった。しかし、技巧の稚拙さそのものはここでは大した問題ではない。問題なのは、上達するための向上心、集中力が、自分が敗北者であるという自嘲から消失してしまったことである。

自分の書いた作品を読み返してみるが、すぐさま作品が書かれたノートを机に放り投げた。こんな敗北者の書いた、魂の欠片もない文章を、果たして誰が読むというのか？

間もなく彼は書かなくなった。ノートも放置されたままになり、どうして破り捨て去らなかつたのか不思議な位である。

天才の作品？個性の表現？そんなものが一体何の役に立っていうんだ？自分を天才だとも思ってるのか？お前は所詮会社すらまともに勤めることのできない、弱い人間なんだよ。

作家になるだって？お前には無理だね。てか、生きてたってしようがない。とつとと死ねや。1円も稼いでいないお前はどうしようもない屑だな。あんな豚女如きに屈するとは何て情けない。

ペンをとらなくなつてから久しい。毎夜、家で一人アルコールを飲み、自分自身を忘却するよう努めた。自分の居場所を求めることすらもはや無くなり、昼間も家で引き籠るようになった。やること

たとえば、アニメ、ゲームをしたり、AVをレンタルして犬のように鑑賞したり、金があることをいいことに風俗に入り浸るようになった。「肉欲の快樂の果てに待っているのは虚無である」とは哲学者が今にも好きそうな命題だが、そのことがまさしく彼に当て嵌まる。風俗に入った時の表情と、出た時の表情には変化がまるでないや更に暗くなっているような気がする。生きた光なぞでんで見受けられない、覇気のなくなった彼の表情が、他人に嫌気を催させ、無視されたりからかわれたりした。自尊心の高い彼には（自尊心はまだ完全には消え去ってはいなかった）、このことはおよそ耐えがたいものであった。

彼は青春を謳歌していた学生時代のことを思い浮かべ、「あのころはよかったな」とか「人生なんて所詮こんなもんさ」と負け犬の典型的な言葉をたびたび投げ出し、日課とすらなった。（昔はよかった、と半分逃避するように思い浮かべることほど馬鹿げた無益なことはあるまい）。そして、その墮落した日々は、変わることなく、過ぎ去って行った、いつまでも、いつまでも。

生命が・・・・・・・・・・ああ・・生命が・・・・・・・・・・
生命が！！・・・・・・・・・・凋んでいく・・・・・・・・・・。

嘔吐

「うっ」突然呻き声をあげ、反射的に片手で口を覆う。蹠踵とした足取りで、茶色の錆がついた流し台の方に身を寄せる。

その薄汚い流し台に顔を下げ、顔を二、三度痙攣させた後、「うええええ」という唸り声と共に、汚物が口内から吐き出される。昨日の飲酒の反動なのだろう。

吐き出し終わった後、「はあはあ」と苦しい息づかいをし、またもやよろよろと布団の方に身を投げる。流し台に吐いた汚物はそのままである。

仰向けになり、腕で顔を覆う。また眠りにつき、この気だるい現実から逃れたいかのように。

「ああ、今日はどうしようか？」

「やることが……決まって……ないな。別に今日に限った事ではないけど」

「今は……10時……か。どうすっかな。またあそこのビデオレンタル店にいったって、アニメかAVでもレンタルしよっかな」

「そっさいや、今はやりのアイドルグループのアルバムが昨日あたりに発売されたっけ。それを買に行こうか。」

「あ、でも、腹減ったな。……少し早いけど近くのコンビニにいったって、昼飯でも買ってくるか」

等々思っていたが、しばらくすると考えることも辞めたのか、暗い部屋の中、ただじっと伏せたままにいる。

この男の今のこの姿！まさしく！！生きた屍という名称がこの男には相応しい。今のこの男に何が出来るというのか？このような無様な生き恥をさらすぐらいなら、いつそのこと華々しく散った方がいいのではないだろうか？

しばらくすると、男はまた動きだす。立ち上がり、あたりに転がっていた財布を拾い上げ、着替えをせずにそのまま外に出る。

外をでたら強烈な日差しが彼に注がれる。今日は雲一つない快晴のようであり、彼の部屋とは著しく対照的である。それ故日差しが彼にはあまりに眩しく感じられ、思わず顔をそむけてしまったのである。若干よろめいた後、猫背の状態で腕で目を覆う。

今の俺には日光すら耐えられないというのか！死者は光よりも闇を好む。同様の事がこの男にもいえる。

腕を下げ、姿勢をただし、近くのコンビニへと向かう。

その際、幾多もの通行人と混じりながら歩くのだが、彼らを見て男は必然的に嘆く。彼らから疎外されている自分に。屹立した姿勢で真っ直ぐに目的地へと向かって歩いている彼らに対し、半ば老人のような背中が曲がっただりとした姿勢でただあてもなく彷徨っているように、コンビニへと向かう自分。

何という違いだろう！何と自分は負け犬なのだろう！

だがそれも何も今に始まったことではない。いつもの事だ。そう考え、自分の想いを半ば強引に胸に押し込んだ。

コンビニに入り、適当におにぎりを二個とコーヒー牛乳を買うが、その際に店員が自分の顔、自分がいつも鏡で見ている陰鬱なふさいだ顔を見て、心なしかどこか軽蔑したような顔つきになったように、男は思えた。（真相は定かではないが、後ろ向きに生きる人間は概して後ろ向きに考えるものである）。

それ故、どこか羞恥心が自分の中に生じて、そそくさとコンビニから出た。そのまま逃げるように近くにある公園へと足を運ばせ、そこにあるベンチに腰掛ける。

重い、気怠い、物憂い

さっき嘔吐したこともあり、ただぼんやりと、ベンチで座る。しばらくして、自分が空腹だということをややく思い出したように、袋から先程買ったおにぎりとコーヒー牛乳を取り出す。だが、すぐには口にしようとはしない。やはりまたしばらく呆然としたままである。幾分か哀愁と嘆きが籠もった溜息がでる。

おにぎりを少量もぎりとり、口へと運ぶ。彼の行っているその作

業にはどこか義務的な観念が込められているようであり、食欲を満たすという生物の根源的な喜びなど、まるで発見できない。食べるよりも、押し込むという動詞を使用する方が適切である。

作業の反復を数回行った後、ピタと手を止める。おにぎりはまだ一個を完食してはおらず、コーヒー牛乳はストローが刺されてはいないもの、口にはつけていない。

すると、男の体がぴくつと痙攣し、即座に顔を地面に向け嗚咽の声とともに、またもや嘔吐する。といっても量は先程に比べ遙かに少量であり、液体物ではなく固形物の形で出てきたことから、吐いたものはいきましたが食べたものが殆どである。

「はあ、はあ」と自分の嘔吐物を直に見ながら、喘ぐ。

公園に行き、何かのきっかけでみじめな自分に嫌気がさし、残りの食べ物たたきつける。そして強張った、怒りのこもった顔つきになり（といつても陰鬱な表情が消えたわけではないのだが）、立ち上がり、おにぎりを地面にくしゃっと投げつけ、飲み物も地面に投げつけたら足で踏みつける。紙袋から茶色い液体が勢いよく流れ出る、

無言のままそこで佇む。そんな彼に頓着せずに（無視されることが最大の嘲笑である）、どこからか小鳥が囀る。

男は情けない姿のまま、家へと帰る。

とするような感触がこぼれる。血である。剃りに失敗して、血が流れだし、左下の頬から顎をつたり、咽喉元まで（太い赤い一筋の糸）を紡いでいくのように流れていく。激しい水音はまだ聞こえる。

彼は少しばかりの間動作は止めたが、気にせずそのまま髭剃りを動かし続けた。今の惨めな自分にはこの痛みを相応しいと思ったのか、それともただ単に拭くのが面倒なのか、血はそのまま滴り、次第に量は大きくなる。並行して痛みも増大したがやはり髭剃りを動かし続けた。

最後、シェービングクリームを拭き取るため、再びあふれ出る水を手に取り、顔に掛ける。水が傷口に沁み、鋭い痛みが傷口から走る。だが彼は構わず再度水を顔に掛ける。やはり痛い。タオルで顔を拭く。傷口の部分をこするとやはり痛みが走る。拭いたタオルを見ればピンク色の血がついている……。水はまだ流れている。

タオルを流し台の上に放り投げ、ようやく蛇口をさつきと逆に捻る。水は止まり、突如沈黙が部屋を支配する。微音すら聞こえぬ。その寂寥な雰囲気になんか耐えかねて、音楽をかける。

持っていたアイポッドで曲をかける。無造作にかけていく。ふわっとした短いイントロの後に流れてくる、悲しみを湛え、身に染みるようなメロディー。モーツァルトの「交響曲40番」である。だが流れるような悲しさに、決してふさぐような陰鬱なものなぞない。生命力が籠もっていて、柔らかい威厳を秘めている。確かに彼の悲しさは疾走している。そしてそれを涙で玩弄するには美しすぎるのである。

やがて総奏部分に達し、一気に盛り上がる。その溢れんばかりの情熱的な悲しみ……。それを男の心を確かに捉える。この悲しみ、この強い悲しみ。だが、彼が今抱いている悲しみはこんな高貴な要素なぞは無かった。そのことを自覚し恥ずかしく思ったのか、思わず曲を止めてしまう。

次の曲を選ぼうと、無器用に、だが慌ただしく手を動しアイポッドを操作していく。まるで音楽に救いを求めるかのように。

静かな、単純なピアノの音が流れてくる。雫を頬に滴らせながら、祈りを無言に捧げる人間……彼はイントロを聞いてそのような人を想像した。

ジョン・レノンの「Love」。肅として語り弾きをしていく。愛とは何か？曲を聞きながら彼は考えた。

彼は昔、一人の女を愛した。情熱に身を焦がし、感情を相手に爆発させた。そしてその愛欲の中にある肉欲も満たした。彼は幸せだった……はずだった。……だが結局は破局に終わったのである。そして味わったのは悶えるような苦悩だった。

これが愛なのか？こんなものに人は何故これほどの価値をつけるのか？それ以来、彼は愛という感情を侮蔑するようになった。

だが今、この曲を聞いたとき、なんとなく愛というものの本質がわかったような気がした。

愛とは？それは情熱を爆発させるものではない。むしろ静かなもの。

手を動かし、次の曲をかける。手際よく操作したことから、今度はすでに念頭にあつたようである。

キラキラ光る小さな音からはじまり、子供の祈りが唱えられる。よりよい世界をつくれるか考えてみようよ。そんな言葉が聞こえる。そして優しい声が入ってくる。マイケル・ジャクソンの「Hello the World」。今こうやって打ちひしがれた俺に何ができるというのか？この広い世界の中で一体俺は何をできるというのか。

後半、合唱が始まり、クライマックスへと曲が向かう。

ああ音楽！彼の心には音楽が失われていたのだ！そして今、再び音楽に共鳴して、枯渇した生命の源泉をうるわそうとしている。もう一曲！彼はこう自分に呼びかけた。そして最後の曲を掛ける。湧き出るような重々しい旋律が短く流れて、しばし静止した後、男の図太い歌声が聞こえてくる。

O Freunde, nicht diese Töne!

n s t i m m e n u n d f r e u d e n v o l l e r e .
S o n d e r n l a s t f u n s a n g e n n e h m e r e
a

歓喜の歌

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere
Anstimmungen und freudenvollere.

これではない・・・そうだ、今の俺の状態は・・・
生命と呼ぶべきものではない。こうして這い蹲っている俺は、生き
物とはとても言えるものではない。こうして墮ちているのは人間の
ありさまではない！

もつと声を。もつと生命を輝き放たなければならない！！

声が止み。春の囁りのような旋律を管弦が鳴らしていく。そして

「Freude！」

その関の声に対応する形で「Freude！」と合唱の声が聞こ
えた後、独唱者が歓喜の歌を歌っていく。重々しい低音の声だが高
らかに旋律を紡いでいき、やがて壮大な合唱となり、生命の喜びを
歌い上げる。

生命。

それは全ての生き物が生誕と同時に抱き続ける源泉。

如何なるものもこの源泉を体内に秘めている。

善人も、悪人も、聖も、閻魔も、獣も、

生命を抱え、燃え尽きるまで進んでいかなければならない。

如何なる艱難が待ち受けてしよう！

それに一人一人、ただ一人耐えていかなければならない、その悲
しき性。

見よ、この世界を。

艱難と同時に素晴らしきもの、美しきものもまた、この世界にあるのである！！

小鳥の囀り

澄明な大気

未知なる大地

先人の知恵

何よりもかれらのものに寄せる愛情

愛情、それこそがもっともこの世で美しく、必要なもの

そしてその愛情はどこから湧くのか？

生命

生命という泉から愛情の水が湧出してくる。

いつからだ？世界という故郷から隠遁したのは？

いつからだ？人生という河流からはぐれたのは？

あの豊穡にあつた源泉が枯渴したのはいつからだというのだ？

生命無き者は苦悩を嘗めない代わりに、此岸に満ちている幸福も享受することを能わぬ

恐るべきは浮世の艱難か。それともそれに怖気づいた自分か。

望むべきは世上の栄光か。それとも誰にも知れぬ幸せか。

目を開き、周りを観よ。

戸を開き、外へでよ。

この世界にある素晴らしき未知のものを、どれほど未だ味わっていないか、数えるがよい。

さすれば汝の体、汝の魂、同じ場所に留まる事はない。

2・やがて合唱が止み、パレードのような音楽が流れ始め、やがて歌手がまたもや歌う。

もっと光を！もっと強さを！もっと誇りを！もっとと歓喜を！

もつとだ、もつと。もつと。もつと。もつと生命を！もつと生命を俺に！！

自分が生きているという喜び

こつやつて音楽を聴くことができるという喜び

そしてこの喜びを味わうことが出来るという喜び

この歓喜がある限り、何人たりとも俺を委縮させる事はできない。

3.そして祝言も終わり、曲調が一変し、重々しい突き抜けようとする奔流のような曲調になる。

・・・しかし、例えどれほどの生命を宿したところで、やはり行き着くところは一緒なのではないのか。

結局人はお互いに分かり合う事ができないのではないのか。交わり、触れ合ってもやがては離れ、

そしてこの歓喜もいつしか洞み、またこのように堕ちてしまうのではないのか。

結局人の目指すべきところは何なのか、そもそも目指すべきものは何なのか。

わからない。本当にわからない……………。

激流していく管弦も納まり、来る大合唱に用意する形、静かに細くゆつくりと曲が進行していく。

すると突如部屋が暗くなり始める、電気はついておらず、カーテンも光を遮断していたため元々暗かったのだが、黒い霧が徐々に濃くなっていくように、更に暗くなっていく。そしてついには漆黒の闇になり、周囲がまるで見えなくなる。

同時に、流れていた静かな音も徐々にフェードアウトしていき、正に大合唱となる場面で完全に聞こえなくなる。

そして漆黒の中、対照的な、透き通るような白色の霧が一箇所に集まり、人影を形成していく。

亡霊

完全な漆黒となった空間において男と白い気体が濃厚に凝縮して人間の形を形成したような亡霊が二人佇む。只管黒い静けさが二人を支配し、先ほどの歓喜の音楽はもはや遠い彼方に消え去った。その反動故か、静けさがより一層森とした気配を漂わせている。

男は亡霊の方に目を向ける。

亡霊は自分と同じ位の身長があり、薄く濃く、一定の間隔で点滅している。だが、全身そのものは微動だにせず、直立不動のその姿勢は亡霊の堅固な意思や生命力を繁栄しているかのようなのである。その堅固な雰囲気にはひるんだのか、男は少し後退りする。だがその顔つきにはどこか羨望めいたものが感じ取られる。

男が亡霊の顔を見ると、亡霊の存在自体には不気味さには戸惑いつつも、その顔つきにはどこか親しみを覚える。何故だろうか？

その顔つきは、彼が愛読していた天才作家群の顔に似ている。ゲーテ、シラー、ドストエフスキー、スタンダール、トーマス・マン、バルザック、ディケンズ……等々、の顔つきがどこか混じっているのである。

亡霊は突如喋り始める。声は先程のテノールの重い声よりもさらに低い音程で話され、その声のエコーとしてあたりに響きわたる。

亡霊：汝、そこで何をしている？何故停滞している？

（相手の重々しい口調に圧倒される形で）男：いや、それは……亡霊：見たところ、汝の生命はどこぞへ消え去ったみたいだが、それは一体どこへ行ったというのだ？

男：……生きる目的が見つからない……見つからないんだ……

亡霊：ふん、下らぬ悩みだ。

男：下らないだと……？

亡霊：汝は自分陶醉しているのだ。わざと何やら高度な苦悩を持つてるかのように自分自身を偽っているのだ。

男：そんなことは……

亡霊：活動しておらぬ。まるで屍だ。

男：しか

亡霊：目的が見つからないから、活動のしようがない、とでも言うのか。

男：うっ

亡霊：汝が探している人生の意味とやらの、回答を授けてやろう。それは活動することだ。動くこと、それこそが正に生物たる証。それにより人は何かを得て、何より生命が光を放ち始める。

男：それはわかってる……わかっているけど……しかし……しかし……俺は……俺には頼る人がいない。俺は一人なんだ。誰もいないんだ！！

亡霊：ほう、孤独に慄くとはな！！貴様は誰かに頼らなければ生きていけないのか？それほどまでの弱者に成り下がるとはな。

男：いや、そんなことは……

亡霊：教えてやろう！！人は皆孤独なのだ。自分自身で自己を何とかせねばならぬ。勘違いするな。他人が必要ない、という意味ではない。だが他人に頼ってはならぬ。自分に頼るがよい。

男：だが、たった……たった一人の力で一体何ができると言うのか。

亡霊：何ができるか？それはやってみなければならぬ。何もせず、ただ悩むだけ、典型的な敗北者だな。

男：……

亡霊：この広大な世界を見渡すがよい。さすれば、汝は一粒の砂程の存在だと気付くであろう。それこそその眇眇たる存在である汝が、悩んでいてそれこそ何になるというのだ？

男：いや、何にも……

亡霊：そうだ、そういう事に気付くだろう。ただ悩むだけの無意味さにな。動くがよい。生物の本質、それは活動すること。

男：しかし、その活動をしてまた敗北して。またこうなってしまうのじゃ……

亡霊：孤独の次は敗北か！！とことん汝は負け犬と化しているのだな。

男：そんな事……はない……

亡霊：負け犬はそこで這い蹲っているがよい。

男：何だと！！

亡霊：戦う前か負けることを考えてどうなる！！………いつからだこんな陳腐な説教をしてしまつとはつくづく呆れてしまつわ。

男：………

亡霊：汝が負ける。一粒の砂如きの汝が敗北したところで一体なにになる？究極的には汝は死を迎える。さすれば

男：それだ！！それだ……その「死ぬ」ということだ！！俺はいつか死ぬ。これは避けられない運命なんだ。だから、結局俺のやった事は一体何になるというのだ？俺はいつか死に、無に帰っていくんだ。

亡霊：それは万物の必然。

男：だつたら、やはり最後には死に行き着くのだつたら、俺の行動は無意味ではないのか？

亡霊：だがこうは考えないのか？死に行き着くからこそ、人は生きることが出来る。終わりがあるからこそ、悔いを残さないように活動できる。強者の法則……それは死の意識により生を輝かせること。

男：………

亡霊：更に死を意識せよ。だがひるんで、縮こまってはならぬ。畏怖するのだ。

男：………

亡霊：汝は死を恐れるか？永遠不滅の生命体になるといふ、宇宙を

貫く大自然の法則を覆そうとでもいうのか？

男：だが人はそう願っているはずだ。

亡霊：不滅になりたいのか。それほどまでに不滅になりたいのなら生きよ。動き、学び、苦悩し、鍛練し、前進し、成し遂げよ。常に死という刃を胸にあてながら、全力で成し遂げよ。

男：それ

（相手の声を遮るように）亡霊：汝が全力で成し遂げたら、必ずや誰かが汝の志を継いでくれる。

男：・・・・・・・・

亡霊：汝の使命を、汝の血を、汝の生命を理解し、それらに共鳴してくれる者が必ずや現れる。偉大な魂を持ったものは決して真に孤独ではない。例えば汝が朽ち果てようとも、汝自身の持っていた志、血、そして生命はその者の中に生きることになる。その意味で汝は不滅になることができる。

男：しかし、それは他人の問題ではないのか？結局自己満足で終わっていくのではないのか？

亡霊：自己満足。それに何に不服だというのだ。幸福な生活とは満足感に満ちているのが何よりの証。

男：・・・・・・・・

亡霊：汝は裕福であり、体が朽ちておらず、周りには整った環境がある。幸福な生活を十分に送れるではないか？一体どれほど他人は汝を羨むだろうか。

男：・・・・・・・・

亡霊：人は意識・無意識に日々触れる様々なものから吸収していく。周りを見てみよ。汝が読んできた天才の作品群。彼らの血もまた、何滴かお前の体内に混じっている。汝の体内にある血の内の何厘かはその天才の血が混じっており。たとえばその血の量がどれほど少量だったとしても、それでもお前の体内に循環している。

ならば、汝も同様の事をするがいい。血を、生命の血を体内から絞り出し、どこかへ滴らせるのだ。

男：．．．．．

亡霊：他者に光を照らすには、まずは汝自身が体内に太陽を有していなければならぬ。だが、今の汝にはあらぬ。かつてあったあの光り輝いていた太陽はどこぞへいったのだ？

男：．．．．．

亡霊：先ずは太陽に再び光を灯せ。そしてその光で生命の血を燃え
たぎらせるがよい。

男：．．．．．

亡霊（徐々に身体が透けていく）：才名自古得人憎。夜齋対月無由
共 欲賦幽懷思不勝。偉業を成し遂げようとしたら、孤独の道を歩
むことは必須。人生を歩むのなら、悩むのは人の定め。それに臆す
ること、それが負けを意味する。活動しないこと、それは死を意味
する。行くがよい。薄命な我々がこの地上において為さなければな
らないことは実に多い。（消え去る）

部屋が再び明るくなり、歡喜の歌がまた聞こえ始める。だが男は
その現象に気付かないかのように、ただ茫然とたちつくしている。

やがて光が差し込み始める。カーテンが風によりふわふわと揺れ、
その狭間から光が零れ落ちてくるのである。

その差し込んでくる光はかつて作品を書き殴った、開いたノート
に向けられている。

男はそれを見て、拳を握りしめ、目を大きく開く。顔に緊張が走
ったかのように強張る。

まだまだ．．．まだ終わっちゃいない．．．！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4915u/>

生命

2011年8月22日12時36分発行